

配架方法を読み解くことによるプロジェクション本棚の開発

佐々木 雪人

電子文献の増加に伴い、デジタルライブラリの持つ「目的文献への到達可能性を高める」役割が重視されている。デジタルライブラリは、そのうちに大量のデジタル情報を保持し、ユーザは読んだ文献を各々の方法で管理し記録している。検索機能の著しい発展により文献到達可能性を高める機能が発展している一方、これらの読んだ文献の管理については、ほとんど発達していないのが現状である。そこで本研究の目的は、物理的な本棚の分析によってデジタルライブラリにおける新たな文献管理方法として「プロジェクション本棚」の有効性を示すことである。

本棚には、人に対して特定の印象を与えたり、逆に本棚に対しても自分の嗜好や思考を投影するという機能を持っている。例えば、書店の本棚は、流行やおすすめ本などにより社会情勢を反映させたり、購買意欲を与える。また、家庭の本棚は、インテリアのように来訪者に対して様々な印象を与える。一方、本棚を構成する際には、自身の嗜好や性格を本棚に反映させる。このように本棚、特に「個人の本棚」には、ユーザの特性が大きく反映されているという点で、パーソナライズされた文献管理の糸口を持っていると考える。そこで本研究の目的の達成のために、物理的な本棚を対象に「本棚の並びが人に与える影響」と「個人による本棚構成の違い」を分析するための2種類の実験を行った。

まず「本棚の並びが人に与える影響」の分析のため、本棚の記憶実験を行った。特定の本棚を数分間眺めてもらい、その後回答用紙に覚えている本の情報を可能な限り書き出してもらった。この実験の結果、端の書籍やシリーズもの、孤立した背の高い本などが特に記憶に残りやすいことが示された。また、場所を介した記憶が印象に残りやすいこと、下段よりも上段や中段の本の記憶率が高いこと、水平位置においても記憶率に差が出ることで新たに確認された。

さらに「個人による本棚構成の違い」の分析のため、空の本棚への構成実験を行った。特定の本を空の本棚に自由に配架してもらい、その構成の様子と構成した本棚から個人の特徴を分析した。この実験の結果、個人の構成する本棚の並びには、ジャンルをまとめたもの、高さを重視したもの、興味のあるものを重視したものなど多くのパターンがあり、それぞれにその人の嗜好や性格が反映されることが分かった。

これらの実験から、本棚は単なる本の収納スペースとしての機能だけでなく、その本の並びに個人の特性を反映させ、逆に、人に対して特定の印象を与える機能を持っていることを示した。本棚は物理的な制約を持ちながらも、情報の配置や構成を通じて人間の記憶や思考に強く影響を及ぼしている。本研究の結論として、デジタルライブラリにおける文献管理システム「プロジェクション本棚」の設計において、本棚は単なる視覚的なメタファーではなく、記憶や認知に影響を与える機能を持ち、よりパーソナライズされたインターフェースの可能性が示された。

(指導教員 宇陀 則彦)